

コロナ禍を経た運動会の内実と今後の在り方に関する検討

—小学校教師への意識調査を通して—

飯島 歩音 (東京学芸大学)

1. 目的

本研究の目的は、現在の運動会の内実と今後の運動会の在り方について、小学校教師の意識を調査することによって考察することである。

2. 研究方法

1) 対象者：実習校である小平市立の小学校を中心とする小学校教師 97 名

2) 調査方法：運動会に対する意識に関する質問紙調査を実施した。

3) 分析方法：質問紙で得られた回答について因子分析(主因子法・Promax 斜交回転)を行った。抽出された因子ごとに2群間の平均値の比較は t 検定、3群間以上の比較は一元配置分散分析を行った。データの分析は、IBM SPSS Statistics 29 を使用した。

3. 結果と考察

教師として運動会を実施することが好きな教師が多く、表現・集団演技や徒競走がよく行われている種目であるということが明らかになった。また、「係活動の指導」の割合も高いことから、児童に係を分担させて教師主導で運動会を運営する形が主流であることが示唆された。

因子分析の結果からは、開催季節の志向性によって運動会の目的が異なり、秋開催を支持する教師の方が「子どもの主体性」を重視していることが明らかになった。人間関係や子どもたちの成熟度から「子どもの主体性」を重視した運動会を支持していることが示唆された。また、運動会は「初任期」よりも「ベテラン期」の教師の方が、新しい形の運動会に積極的であることが明らかになった。「初任期」の教師は、小学生の頃の経験

が強く残っていることが推察された。したがって、「ベテラン期」の教師の方が運動会の変容に寛容であることが考えられた。指導の嗜好性においては、種目によって運動会で重視しているものが異なることから、種目を精選することにより、運動会の目的や意義を定めることができるということが示唆された(図1)。

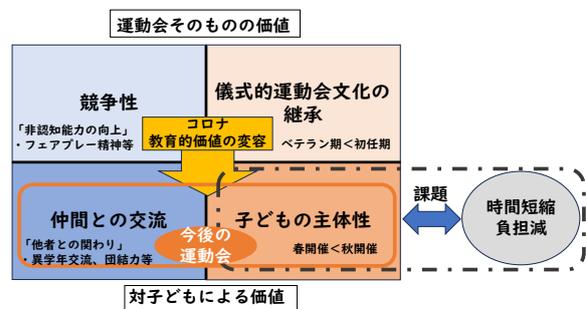


図1 運動会の内実と今後の在り方

4. 結論

本研究では、コロナ禍や時代による教育的価値の変容から、運動会に対する教師の意識も変容していることが明らかとなった。その中で、運動会そのものの価値に分類できる「競争性」と「儀式的運動会文化の継承」に対する意識は薄れていき、対子どもによる価値に分類できる「子どもの主体性」と「仲間との交流」に対する意識が強くなっていくということが示唆された。教師の負担減少と子どもの主体性を生かした運動会の両立が今後の課題となるだろう。

5. 主な参考文献

神谷拓(2022) 運動会の指導の原理と実践. 大修館書店.